

# 平成 18 年度農学部卒業時・農学研究科修了時アンケートの 評価分析結果

平成 19 年 6 月 19 日  
自己点検評価委員会  
委員長 柵木利昭

応用生物科学部自己点検評価委員会では、年度計画・目標「これまでの授業評価を見直し、一層の授業改善に努める」ことの一環として、表記の卒業時・修了時アンケートの評価を平成 17 年度に引き続き実施しました。評価結果と分析結果を報告いたします。

今後、これらの評価をもとに、教員の授業内容の改善につなげ、教育カリキュラムを充実していく所存です。分析結果をお読みいただき、ご意見・ご要望がありましたら、学部までお寄せいただければ幸いです。

## I 平成 18 年度農学部卒業時アンケートの分析結果

### 1. 回収率について

学部全体で約 84.4% (186 人中 157 人) と高い回収率であった。その内訳は生物資源生産学科 (48 人中 45 人、93.8%)、生物生産システム学科 (46 人中 36 人、78.3%)、生物資源利用学科 (63 人中 51 人、81.0%)、獣医学科 (29 人中 25 人、86.2%) であり、学位記伝達時に調査し回収したため、このような高い回収率となったと考えられる。同様の平成 17 年度の調査の 91% (209 人中 190 人) よりやや低く、16 年度の 203 人中 174 人、85.7% とほぼ同等である。

### 2. 評価項目について

評価の対象とした 6 項目 (49 小項目) は 16 年度、17 年度と全く同じもので、一部の小項目を除けばいずれの学科にも共通性が高く、かつ授業改善に資する上で基本的な項目である、と本委員会では判断している。

その概要を以下に記したが、より詳細な評価分析は各委員会・各学科で行い、新学部での改善活動につなげていただきたい。

#### A. 学部・学科について

##### A-1. 進学時に本学部・学科を選んだ理由は何ですか (複数回答可)

「興味ある分野だから」を生物資源生産学科 (以下生産学科) は 60%、生物生産システム学科 (以下システム学科) は 47%、生物資源利用学科 (以下利用学科) は 63% が挙げたが獣医学科はやや少なく 36% の者が選んだ。一方、「就きたい仕事があるから」は獣医学科 (84%) を除く 3 学科はそれぞれ 3~5 名が選んだのみであった。獣医学科の学生は進学時に就業に対する目的が明確であることを示している。

#### A-2. 学科のイメージは入学前と一致していた

「強く思う」と「思う」を合わせて肯定的に回答した者は全体で 34%であり、23.7%の者は否定的に（「思わない」と「全く思わない」）と回答している。否定的回答は、生産学科、システム学科、利用学科の 3 学科が 20%前後であったのに対し特に獣医学科は 40.0%と高い率を示した。この傾向は 16 年度及び 17 年度の卒業生にも見られ、入学後の学科のイメージは入学前と比べギャップがあると感じていることが窺われる。アドミッションポリシーはじめ、学部の広報を見直し、あるいは入学生の期待にこたえる教育体制を確立する必要がある。

#### A-4. 大学で身につけたと思うのはどれですか（複数回答可）

各学科ともよく似た傾向を示し、上位を占めたのは学部全体で実験・研究能力（回答者 157 人中 80 人、50.9%）以下論理的思考（53 人）、課題設定・問題解決能力（49 人）、判断・洞察力（43 人）、気力・忍耐力（41 人）、対人関係能力（36 人）などである。しかしながら、英語運用力は 2 人、国際感覚は 6 人が選択したに過ぎず、これらの傾向は 16 年度、17 年度とよく一致する。教養英語、科学英語等の大いなる改善、学外資格の取得指導を勧めるなどの努力が必要と思われる。

#### A-3. 本学部・学科で学んだことを誇りに思う

学部全体で「強く思う」（21.9%）と「思う」（43.9%）を合わせ 65.8%（3 人中 2 人）が肯定的に回答している。しかしながら、「A-5. 高校の後輩に本学部への進学を推奨したい」の問いに対し、「強く思う」と「思う」を合わせて 138 人中 70 人、50.7%（2 人に 1 人）の学生しか肯定的に回答しておらず、A-3 より 15 ポイント少なく、ギャップがかなりある。また、A-5 の質問に関しては、157 人中 19 人（各学科 2~6 人）が無回答、4 人が回答保留もあり、これらの理由を今後解析する必要がある。

本学部・学科で学んだことを誇りに思い、高校の後輩に本学部への進学を推奨できるような教育を目指し、さらなる改革改善が求められる。

### B. 教養教育について

#### B-1. 教養教育は充実していた

「強く思う」と「思う」を合わせ全体で 142 人中 57 人、40.2%が肯定的に回答したに過ぎず、約 20%の学生は否定的（思わないと全く思わない）な回答をしている。それでも、17 年度に比べると 5 ポイントほど改善傾向が見られた。

#### B-2. 教養教育は時間的に充分であった

全体で 34.4%、3 人に 1 人が肯定的に回答している。一方、否定的（充分でなかった）回答は 12.7%であった。

#### B-3. 教養教育は人間形成に役立った

学部全体で 142 人中 35 人、24.7%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したに過ぎず、49 人（34.5%）が否定的な回答（「思わない」と「全く思わない」）をし、否定的回答が 10 ポイントほど多い。B-1 の結果とともに、教養教育のさら

なる充実・改善を補習教育・基礎教育・真の教養教育の視点から、今後教養教育推進センターと協同して行なっていく必要がある。

## C. 専門教育について

### C-1. 自分の学科の教育理念・目標を知っていますか

各学科ほぼ同じ傾向を示し、学部全体で僅か 49 人、32.2%が肯定的「はい」に回答したに過ぎず、103 人、67.8%と 3 人に 2 人までもが否定的「いいえ」に回答している。これでも、17 年度（4 人に 3 人が否定的回答）と比較するとかなり改善傾向が見られる。また、「C-3. 各授業の習得目標が明示されていた」かの問いに対し肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したのは全体で 37.2%と C-1. の質問とよく一致している。シラバスやガイダンス、ホームページ等あらゆる機会を捉え、教育理念・習得目標を伝えていく必要がある。

### C-2. 専門科目は総じてよく勉強した

全体で 90 人、58.0%が肯定的（「強く思う」と「思う」）と回答し、否定的回答（「思わない」と「全く思わない」）はわずか 16 人、10.3%であり、17 年同とほとんど同じ傾向が見られた。特にシステム学科は否定的回答は全くなかった。専門科目に対する学生の自己評価は比較的高いが、「B-5. 教養教育は総じてよく勉強したか」の問いに、全体の 31.4%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に答えたに過ぎず、特に獣医学科は肯定的回答は 2 人、9.5%と極めて少なかった。全体的に教養科目比べ、専門科目の肯定的評価は約 17 ポイントほど高い。

### C-5. 各講義や実習の内容は理解できた

講義は学部全体で 62.6%（昨年度 65%）、実習は 73.0%（昨年度 74%）が肯定的回答をしており、特に実習に昨年度と同様に高い評価を与えている。否定的回答は講義で僅か 6 人（3.8%）、実習で 5 人（3.2%）と極めて少なかった。そして、「C-6. 学科で勉強してきて、興味のもてる専門分野を見つけることができた」との問いに対して、学部全体で 70.7%（昨年度 70%）が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答している。

さらに詳細に検討すると「C-8. 専門科目は自分の勉強したいことを網羅していた」との問いに対し学部全体で 37.8%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答しているが、獣医学科は比較的多く 44.0%が肯定的に回答した。また、「C-4. 専門科目を体系的に履修することができた」及び「C-7. 学生実験・実習の時間および内容は適当であったか」の問いに対し肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したのは学部全体でそれぞれ 45.7%、51.0%（昨年度それぞれ 47%、50%）であった。これらの項目は昨年度とほぼ同様の回答傾向が見られた。受験時に教育カリキュラムを伝えるとともに、学生が学びたいと考える学問分野の科目を構築していく等のさらなる改善が必要である。

一方で、「C-10. 教育に必要な施設・設備は充実していた」に対して、獣医学科はわずか 4 人、16.0%（昨年度 1 人、3.6%）が肯定的に（「強く思う」と「思う」）、64%が「どちらとも言えない」とし、20%は否定的に（「思わない」と「全く思わない」）回答するなど、施設・設備に対する強い不満を表している。獣医学科を除く 3 学科は 29.4%ないし 51.0%が肯定的に回答している。

さらに、「C-9. 各授業はよく準備されていた」の問いに生産学科は 40.0%、システム学科は 51.4%、に対し利用学科は 27.5%、獣医学科は 32.0%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答したに過ぎない。「C-11 各科目には適当な教員が配置されていた」の問いに対し生産学科は 51.1%、システム学科は 54.3%、利用学科は 56.0%であるのに対して、獣医学科は僅か 24.0%が肯定的（「強く思う」と「思う」）と回答している。特記すべきは、この C-9(授業の準備)、C-10(設備の充実)および C-11(適当な教員)の 3つの質問に対する回答は昨年度と同様によく一致し、いずれの問いに対しても獣医学科の評価が他の学科に比べ低いことである。応用生物科学部獣医学課程においても、旧獣医学科のカリキュラムを踏襲し教育を行なっているため、これらの調査を踏まえた改善活動を行なう必要がある。

実習内容については評価が高いことから内容を含む実習について応用生物科学部でも継続していくと共に、教育に必要な設備・施設のさらなる充実、教員の適切な配置、よく準備された授業が強く求められている。

## D. 卒業研究について

### D-1 希望する研究室へ入室できた

学部全体で「強く思う」と「思う」と肯定的に回答したのは 86.5% (昨年度 87%) であった。全体の 71.8%は「強く思う」と回答し、第 1 志望の研究室へ入室できたと思われる。特にシステム学科と獣医学科はそれぞれ 80.0%、76.0%ときわめて高い値を示し、4人中 3人が希望した研究室へ入れたことを示している。一方、生産学科と利用学科はそれぞれ 66.7%と 68.6%とやや低く、3人中 1人が若干の不満の残る結果を示している。「思わない」と「全く思わない」すなわち希望の研究室に入室できなかった者が生産学科に 3名 (6.7%) いたことは反省すべきである。

### 「D-4. 卒研テーマに満足してしている

生産学科は 71.1%、システム学科は 68.6%、利用学科は 78.4%とそれぞれ肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答しているが、獣医学科は 48.0%が肯定的に答えているに止まっている。獣医学科は 16.0%が否定的（「思わない」と「全く思わない」）に他の 3 学科は 5%前後が否定的に回答している。これらの数字は、「D-6. 卒研指導は適切であった」との問いに極めてよく反映されている。すなわち、生産学科は 71.1%、システム学科は 64.7%、利用学科は 78.4%、獣医学科は 52.4%が肯定的に回答している。特に各学科において「卒研のテーマに満足している」と答えた数と「卒研指導は適切である」と答えた数はほとんど一致している。

卒論のテーマ、指導に対する評価は獣医学科が、4人中 3人までが希望する研究室に入室できたにもかかわらず、他の 3 学科に比べ 10 ポイント以上も低い。すなわち、獣医学科では 2人に 1人しか卒論のテーマや指導に満足しておらず、16年度、17年度にも同様のことが指摘されており改善の余地がある。

### D-2 研究室への分属は何を基準に決めましたか（複数回答）

学部全体で 46.4%が「研究への興味」、これに加えて 18.0%が「教員の人柄」、16.0%が「研究室の雰囲気」を挙げている。

### D-3. 卒研期間は適切であった

肯定的（「強く思う」と「思う」）回答が 59.0%に見られる一方、否定的回答が 14.7%と「どちらとも言えない」が 26.3%に見られ、昨年度も同様な傾向であった。現在、設定されている卒業研究の期間が、教育上適切な長さであることを学生に伝え、理解されるよう努力する必要がある。

#### D-7. 卒研は自分にとってどんな意義がありましたか（複数回答可）

その上位に挙げられたのは、「論文作成・作文表現力の向上」（57.3%）、実験・研究能力の向上」（48.1%）「プレゼンテーション能力の向上」（40.1%）、「問題設定・解決能力の向上」（37.6%）などの実務的能力であった。一方、「コミュニケーション能力の向上」（10.2%）や「英語能力・読解力の向上」（10.8%）を挙げる者は少なかった。また、「特に意義を見出せない」とした者がその数は少なかったが 3名（1.9%）いた。16年度、17年度とほとんど同じ傾向が見られた。

#### D-5. 卒研は卒後進路に影響した

学部全体の 32.2%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に、31.6%が否定的（「思わない」と「強く思わない」）に、28.4%が「どちらとも言えない」と回答しその評価は割れた。気になるには「回答保留」が各学科で 3名合計 12名（7.7%）いたことである。他の多くの項目で「回答保留」と答えた者は数名か全く無いのに比べ多い。卒研が卒後の進路に与えた影響については、もう少し長い人生を考えた上で判断すべきものなのかもしれない。同様の傾向は 16年度、17年度にも見られた。

### E. 学生生活の支援・指導について

#### E-1. 教員による学習・生活などの指導は適切であった

学部全体で肯定的（「強く思う」と「思う」）な回答は研究室の教員（70.2%）が比較的多く、授業担当教員 51.6%、クラス担任（50.7%）と教務担当教員（47.4%）はやや低かった。学科別では利用学科が他の 3学科に比べ、いずれも 59%以上の肯定的回答が目立った。利用学科では研究室の教員に加えクラス担任、教務担当教員がこの点に関してよく機能していたと言える。

#### E-2. 事務部の学生に対する対応は適切であった

肯定的（「強く思う」と「思う」）な回答は学部学務係（33.1%）が本部学務部（31.2%）よりもやや少ないが、いずれにしてもその評価はあまり高いものではない。全体で学部学務係で 3人に 1人、本部学務係でほぼ 4人に 1人がその対応は適切でない」と否定的に評価している。16年度、17年度も同様の傾向が見られた。

#### E-3. 就職および進学に指導や支援は適切であった

肯定的（「強く思う」と「思う」）な回答は全体で僅か 21.5%に過ぎず、最も多かったのは「どちらとも言えない」の 47.1%であり、否定的（「思わない」と「全く思わない」）な回答も 26.2%あった。ここでも学生の 4人に 1人は不満を示している。全く同じ傾向が 16年度、17年度も見られた。これら支援について農学部学生に対して根本的な見直しを行い、新学部応用生物科学部でも、既に卒業予定学生となっているため、どのような支援体制が構築されたのか検証する必要がある。

## F. 卒業後の進路先（就職先）について

### F-1. 卒業後の進路先を選んでください

会社に就職したのは生産学科の 35.6%、システム学科の 57.6%、利用学科の 25.5%と獣医学科の 5 人、20%であった。進学したのは生産学科の 44%、システム学科の 24.2%、利用学科の 62.7%および獣医学科の 12.0%であった。これに関連して「F-2. 希望する進路先に進めた」に対して、学部全体で「強く思う(48.0%)と 思う(23.3%)」を合わせ、肯定的な回答をした者は 71.2%と高率を示した。しかし、システム学科では「思わない」と「全く思わない」を挙げる者が合わせて 5 名(15%)いた。昨年もほぼ同様の傾向が見られた。

### F-3. 進路先は学んだ専門分野と関連性が高い

学部全体の 60.3%が肯定的（「強く思う」と「思う」）に回答している。一方で、8.2%の者が、特に生産学科では 11.6%が否定的（「思わない」と「全く思わない」）に、すなわち、進路先は専門分野と関連性が低いと評している。学んだ専門性をより活かせる就職口を積極的に開拓していく必要がある。また、専門性の高い就職口は、大学院修了が前提なりつつあることを学生に伝え、進学によりさらに専門的に学ぶことを勧める必要がある。

### F-4. 就職にはどのような能力の養成・強化が必要とご思いますか（複数回答可）

全体で上位を占めたのは、口頭発表能力（42.0%）、討議などコミュニケーション能力（40.8%）、問題設定・解決能力（31.2%）、専門知識（31.2%）、などであった。社会的責任自覚能力・倫理教育（24.2%）、日本語による論理的な記述力（23.5%）、インターンシップ（19.1%）、などがこれに続き、情報処理能力や国際的に通用する英語運用能力は共に 13.4%の者が挙げたに過ぎなかった。16 年度および 17 年度とほぼ同様の傾向を示した。上記のように就職には「討議などコミュニケーション能力」の養成・強化を 40.1%と多くの者が、その必要性を挙げているが、「D-7 卒研は自分にとってどのような意義がありましたか」の問いに対して、「コミュニケーション能力の向上」を指摘した者は 10.8%とかなり低い。大学院修了生も同様のことを指摘しており、今後、このような点にも留意して教育していく必要がある。

## II 平成 18 年度農学研究科修了時アンケート

### <分析結果>

#### 1. 回収率について

全体で約 76.8%（69 名中 53 名）の回収率であり、専攻別には生物資源生産学専攻（以下生産学専攻）21 名中 18 名 85.7%、生物生産システム学専攻（以下システム学専攻）16 名中 12 名 75.0%、生物資源利用学専攻（以下利用学専攻）32 名中 23 名 71.9%で昨年度（全体で 81%）よりやや低い値であった。

## 2. 評価項目について

評価の対象とした5項目（21小項目）は昨年度と全く同じで、一部の小項目を除けばいずれの専攻も共通性が高いと判断された。

### A. 研究科・専攻・研究室について

#### A-1. 本研究科を選んだ理由（複数回答可）

「自分が学びたい専門分野の先生がいるから」を全体の52%が、次いで「本学の出身だから何となく」を37.7%が選んだ。この両者をあわせて90.6%に達する。これに関連して、「A-2. 研究室の選択基準」を複数回答可で求めたところ各専攻とも「研究への興味」を一番に挙げ、全体で69.8%であった。「卒論を行った研究室だから」と「教員の人柄」が35.8%とこれに次いだ。「就職希望先と関連が深いから」を挙げたのは利用学科の僅か3人のみであった。16年度、17年度とほぼ同様の傾向が見られ、研究への興味、指導教官を含め「研究の継続性」で研究室を選んでいることが判る。特記すべきは利用学専攻は「研究室の雰囲気」と「研究室のメンバー」をそれぞれ34.8%、26.1%が挙げている。雰囲気の良い研究室運営が進学選択の理由の一つとなっていることが窺われる

#### A-6. 修論作成のための研究は自分にとってどんな意義がありましたか（複数回答可）

全体で上位を占めたのは「実験・研究能力の向上」(64.2%)、「問題設定・解決能力の向上」(60.4%)であり、「プレゼンテーション能力の向上」(54.7%)「論文作成・作文表現の向上」(49.1%)とがこれに続いた。「コミュニケーション能力の向上」(29.8%)や「英語論文読解力の向上」(22.6%)を挙げた者は少なかった。

また、これに関連して「A-9. 大学院生活を通じ身につけたと思うものはどれですか」を複数回答可で問うたところ、「A-6. 修論の意義」に対する質問と同様に「課題設定・問題解決能力」を66.0%が、「実験・研究能力」を64.1%や「プレゼン能力」を54.7%が挙げた。これに対して、「国際感覚」と「英語運用力」はそれぞれ13.2%、9.4%と極めて少なかった。これらの傾向は昨年度にも見られ、学部生の卒研に対する態度とよく一致している。

#### A-3. 修論テーマに満足している

肯定的（「強く思う」と「思う」）回答は全体で75.7%であり、特にシステム学専攻は16年度、17年同様91.7%と極めて高い数字を示し、生産学専攻(61.1%)と利用学専攻(78.2%)は僅かに低く、否定的（「思わない」）な回答は利用学専攻で3人、13.0%見られた。。

そして、「A-5. 修論の研究指導は適切であったか」の問いに対し肯定的な回答（「強く思う」と「思う」）は全体で73.6%であり、専攻別に見るとシステム学専攻(100%)が高く利用学専攻(56.5%)とやや低い。否

定的回答（「思わない」と「強く思わない」）を挙げる者は生産学専攻とシステム学専攻ではなかったが、利用学専攻では3人（13.0%）に見られた。

#### A-7. その研究室で学んだことを誇りに思う

肯定的回答（「強く思う」と「思う」）はシステム学専攻では昨年度に引き続き100%であったが、利用学専攻は78.3%、生産学専攻で55.5%とやや低く否定的回答（全く思わない）が生産学専攻に1人見られた。しかし、この設問に限って利用学専攻において否定的回答が無く、無回答が3人（13.0%）見られた。この無回答の3人は「A-5 修論の研究指導は適切であった」かの問に対し否定的回答をした3人の可能性がある。

#### A-8. 研究室のイメージは大学院入学前と一致していた

肯定的な回答（「強く思う」と「思う」）は全体で58.4%、利用学専攻で昨年度とほぼ同じ68.1%であったが、昨年度85%と高率を示したシステム学専攻（44.4%）と生産学専攻（66.7%）はやや下がった。

前述のように「A-1 本研究科を選んだ理由」として、「自分の学びたい専門分野の先生がいるから」を全体の52%が、次いで「本学の出身だから何となく」を37.7%が選び、この両者をあわせて90.6%に達する。「研究の継続性」を求め入学してきたにも係らず、「研究室のイメージは大学院入学前と一致した」と肯定的に回答したのは全体で58.4%しかおらず、この30ポイントにも及ぶギャップはどこから来たものか検討し、改善をしておく必要がある。

### B. 大学院生活の支援・指導について

#### B-1. 教員による学習・生活などの指導は適切であった

研究室教員：肯定的な回答（「強く思う」と「思う」）はシステム学専攻は100%と昨年度（90%）に引き続き高かったが、生産学専攻では61.1%、利用学専攻では66.7%に過ぎなかった。同様の傾向は昨年度にもみられた。

授業担当教員：肯定的回答はシステム学専攻（100%）を除いて生産学専攻（50.0%）、利用学専攻（56.5%）と2専攻共に研究室教員による指導に比較し10ポイントほど少なかった。

#### B-2. 事務部の学生に対する対応は適切であった

全体で肯定的回答（「強く思う」と「思う」）は学部学務係で39.7%と昨年度の51%よりの11ポイント下がったが、本部学生部では45.3%と昨年度（43%）とほぼ同じであった。いずれにおいても半数以上が不満を抱く対応の原因を突き止め、抜本的な改善が必要である。

#### B-3. 就職および進学への指導や支援は適切であった

全体で肯定的回答（「強く思う」と「思う」）は僅か38.0%に過ぎず、32.0%は「どちらとも言えない」とし、否定的回答（「思わない」と「全く思わない」）が26%も見られた。すなわち、昨年度（28%）よりやや改善されたといえ、就職などの指導は適切であったと感じている者は全体で3人に1人

である。これらの支援について、学部学生と共に、根本的な見直しを行い、早急な支援体制づくりを行なう必要がある。

#### B-4. 大学院在学中に取得した資格がありますか

全体（53名）でTOEIC4人（550、640、700、815点）、TOEFL1人（265点）、初級シスアド1人、簿記3級2人、日本語能力1級1人である。また、「B-5 在学中専門学校等に通いましたか」の問いに対し英会話学校を1人が挙げている。これらの数字は「修論作成の過程などで身に付けたものとして英語運用能力（A-9）」を5名（9.4%）が、「英文論文読解力の向上（A-6）」を12名（22.6%）が選んだことをよく反映している。これら英語に関する質問に対する修了生の回答は、学部卒業生の回答に極めてよく一致している。この傾向は16年度、17年度にも見られた。

### C. 修了後の進路先（就職先）について

#### C-1. 進路先を選んでください

全体の75%が会社に、7.7%が官公庁に就職し、3.8%が進学（専門学校を含む）した。昨年3月25日現在で未定はいなかったが今年度は未定は5.8%いた。

#### C-2. 希望する進路先に進めた

肯定的回答（「強く思う」と「思う」）は全体で73.0%であり、「思わない」と回答したのは全体で2名（3.8%）だけであった。しかしながら、「C-3. 進路先は学んだ専門分野と関連性が高いか」の問いに対し、肯定的回答（「強く思う」と「思う」）は36.7%に過ぎなかった。システム学専攻を除く2専攻において11人、22.4%が否定的（「思わない」と「全く思わない」）に回答した。肯定的回答は学部卒業生（60.3%）よりもさらに20ポイント以上も低く、就職先は専門分野との関連が薄いと評価している。専門性を活かせるような就職口をさらに積極的に開拓していく必要がある。すなわち、修了生だけでなく教員にもより積極的な「就活」が求められる。

#### C-4. 就職にはどのような能力の養成・強化が必要とご思いますか

（複数回答可）

全体で上位を占めたのは、全体で「討議などのコミュニケーション能力」（58.5%）、次いで「問題設定・解決能力」（49.0%）、日本語による論理的記述力（39.6%）及び「口頭発表能力」（39.6%）であった。昨年度と同様の傾向が見られた。「討議などのコミュニケーション能力」の養成・強化が学部生と同様に求められている。

## D. 総合評価

### D-1. 大学院に進学して満足しましたか

肯定的回答（「強く思う」と「思う」）は全体の 84.6%に見られ、システム学専攻と利用学専攻でそれぞれ 91%見られたが、生産学専攻では 71%とやや少なかった。否定的回答（「思わない」）は生産学専攻で 1 人見られたが、生産とシステムには全く見られなかった。システム学専攻は昨年度に引き続いて 90%以上の修了生が大学院に進学して満足したと回答している。

このアンケートで修論作成、生活支援、就職支援等の各項目において明らかになってきた問題点をよく検討し、各教員、委員会がそれぞれの立場で平成 20 年度に発足する新研究科の教育研究指導に反映させることが求められる。